

高等
小學
國語讀本
一

285

檢定申請本

K1208
68.4d
1

K120.8

68.4d

1

伯爵 副島種臣 閱
 伯爵 東久世通禧 閱
 西澤之助 編

高等 小學 國語讀本

東京 國光社藏版

緒言

一、本書は、改正小學校令の旨趣に據り、高等小學校國語科の教科用書に充てんとて編纂せるなり。

二、本書は、日當須知の文字及普通の文章を知らしめ、兼ねて徳を啓發せんことを旨とせり。

三、本書は、材料を修身、歴史、地理、理科、實業、其他、日常の生活に必須なる事項に採りて、教授に多方の趣味を添へたり。

四、忠孝一致は、國體の精華にして、報本反始は、皇道の神髓なり。故に、毎卷、必反覆講説して、其の義を明ならしめたり。

五、勤儉尙武は、本邦固有の美德なり。故に、本書は、尙武を經とし、勤儉を緯とし、兵事、并に、産業上の智識を授け、以て、益富國強兵の基礎を固くせんことを期せり。

六、古今の偉人傑士にして、公益を弘め、世務を開き、大に、國運の



進歩を助けし者の事蹟中、風教を益し、人心を勵すに足るべきものは、之を採録して、實踐躬行の模範たらしめたり。

七、海事思想の養成は、我が國今日の急務なれば、これに關する事項を掲げて、其の發達を促し、以て、富強の本源を鞏固ならしめんことを期せり。

八、本書は、教材の排列を、季節と、關聯一致せしめ、以て、學習の興味を深厚ならしめたり。

九、本書は、普通國文の模範たらしめんが爲に、勉めて、文章を簡易流暢ならしめたり。

十、歌詞は、平易にして、趣味多きものを選び、諷唱の際、自、高尚なる品性を養成するを得べからしめたり。

十一、挿畫は、本文の會得を助け、兼ねて、趣味を添へんが爲に、優美にして、且、有益なるものを選べり。

十二、本書は、全編を、八冊とし、每學年、各、二冊を課し、四學年にて修了せしむべき豫定なり。然れども、又、每卷、記事を總括して、簡より、繁に及したれば、二學年、三學年の學校に用ゐても、教授の不便なかるべし。

十三、本書は、每卷、各課をして、横に、聯絡を保たしめ、又、各學年の教課をして、縦に聯絡せしめれば、これによりて、生徒の觀念を鞏固ならしむることを得べく、且、單級の學校に用ゐても、便益尠からざるべし。

十四、高等科にて修むべき學科は、種類多くして、各、主たる目的あり。然れども、各科、互に、聯絡を保ちて、相補益するにあらざれば、其の效、甚尠からん。故に、本書は、特に、此の點に注意して、新に、本社の出版せる高等小學修身書、小學國史、小學地理、小學理科、高等小學習字帖、及、小學習畫帖とも、密接の關係を保た

しめたり。
 十五、讀本中の教授事項各課縦横の聯絡なく、且他の諸學科との關係、極めて微弱なるは、今日一般の通弊なり。本書は、此等の舊軌を改め、教科の聯絡と統合とを全うせしめんことを期せり。

明治三十三年十月

編者 織

高等小學國語讀本一

目次

第一課	玉のひかり	五
第二課	我が家	七
第三課	春の野	十
第四課	蝶と蜂	十一
第五課	花	十四
第六課	草木	十七

- 第七課 伊藤小左衛門 十九
- 第八課 茶 二十三
- 第九課 分業 二十五
- 第十課 女子の務 二十八
- 第十一課 工藝 三十一
- 第十二課 養蠶 三十四
- 第十三課 上杉治憲 三十六
- 第十四課 家を治むる道 三十九

- 第十五課 四季 四十一
- 第十六課 游泳 四十四
- 第十七課 河海 四十六
- 第十八課 商業見習 四十九
- 第十九課 貨幣の用 五十三
- 第二十課 日記 五十七
- 第二十一課 霧嶋山(一) 六十
- 第二十二課 霧嶋山(三) 六十三

- 第二十三課 大沽砲臺の占領 六十六
- 第二十四課 天津城の陥落 六十九
- 第二十五課 雲にそびゆる 七十三

高等小學國語讀本一



伯爵 東久世通禧 閱
 伯爵 副嶋種臣 閱
 西 澤之助 編

第一課 玉のひかり

金剛石もみがさずば

玉のひかりはそはざらん

人もまなびて後にこそ

まことの徳はあらはるれ

六

時計のはりのたえまなく

めぐるが如く時のまの

日かけをしみてはげみをば

如何なるわざか成らざらん

この御歌は、皇后陛下のよませたまへるなり。我等はこの御歌のこゝろを、我が心として、今より、さらに、學をつとめ、業をはげみ、

よき人となりて、君のため、國のためにつくすべきなり。

第二課 我が家

我が家には、父母と祖父母とありて、常に、我等を愛し給へり。我等は、兄弟四人にて、兄は、中學校の寄宿舎にあり。妹と、弟と、我とは、家にありて、仲よくくらせり。

我は、日々、妹をともなひて、學校にゆき、家に

歸りては、共に復習するを例とせり。

弟は、未、學校には入らざれども、我が傍に來て、讀み書きなどのまねをして遊べり。

兄とは、常に、手紙を往復して、互に、様子を知らせ合へり。

我が家は、この村の舊家にて、分家、親族、ことに多し。このあたりの田畑は、先祖の開墾せられたるものなり。

勤 儉

居間のなげしには、勤儉の二字をしるせる額を掲げたり。こは、我が家風をあらはせるなり。かたはらに掛けたる、古き槍は、中頃の先祖が、朝鮮征伐のとき用ゐて、功名せられしものなりとぞ。

第三課 春の野

野へには、若草が青々とはえ、スミレ 堇たんぽぽ、れんげ草、菜の花などが、さまざまに咲きみだれて、錦をしいた様でございます。

蝶が、二つ三つ、戯れて飛びめぐつてゐるのは、櫻の花にあきて、菜の花をもとむるのか、菜の花にあきて、櫻にとまらうとするのか。其の、風にまかせて、ひらくとしてゐる様

は、まことに面白うございます。

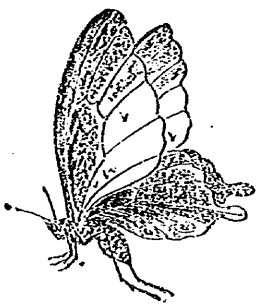
堤の柳に、馬をつないで、景色をながめてゐる人もあれば、道のほとりに、つくしをつんで遊んでゐる子供もあります。

四季のながめは、いろくございますが、春は、とりわけのどかで、いづれを見ても、面白からぬものはございません。

第四課 蝶と蜂

蝶は種類甚多く、羽の色の白きもあり、黒きもあり、黄なるも、まだらなるもありて、いづれも、まことに美し。

これらの蝶は、多くの卵をうむ。卵かへれば、毛虫となりて、草木の葉をむさぼり食ひ、甚しきは、作物を枯らしつくすことあり。



この毛虫、また化して、蝶となる。されば、美し

く愛らしき蝶も、もとは、農家にとりて、おそろしき害をせしものといふべきなり。

蜂も、亦、種類多き昆虫なり。其中、人の飼養するものを、蜜蜂といふ。蜜蜂には、王蜂、雄蜂、工蜂の別あり。集りて、巢を営み、各、その職を守り、相助け、て生活す。

王蜂は、雌蜂にて、形、大きく、一巢ごとに、一足づゝ住み、卵をうみて、種族をふやす。雄蜂は、

王蜂よりも小にして、一巢の中に、數疋あり。



蜂王



蜂雄



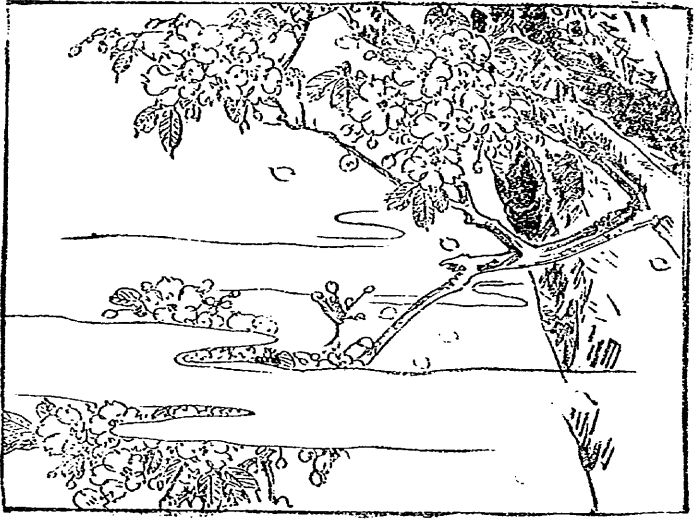
蜂工

工蜂は、労働者にて、其の數、最

多く、巢を造り、食を運び、敵を防ぐなどを職とせり。

蜜蜂は、花の液を吸ひ取りて、巧に、蜜をかもす。この蜜は、效用多きものなり。

第五課 花



春霞立ちをめし頃より、人々の待ちたる花は、やうやう咲きみちて、雲かと思まがふばかりとなれり。殊に、朝日のさしをひたる美しさは、いはん方もなし。

草木の花の、數多き中に、櫻は、最美しければ、世に、木の名をばよばずして、たゞ、花とのみいひならへり。

此の如き美しき花は、他の國には、たゞひあることなし。

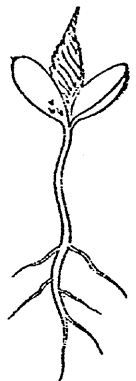
大和の吉野山、山城の嵐山は、昔より、櫻の名所として聞えたり。

文法 春霞、櫻朝日、吉野山、親族、學校等は、物の名

をいふ詞にて、之を、名詞といふ。

第六課 草木

田畑ニマキタル穀物、野菜ノ種モ、水ニウル



ホヒ、日ニ暖メラレテ、根ヲ生ジ、芽ヲ出ダセリ。ス

ベテ、草木ノ根ハ、種ヨリ下ニ出デ、土中ニハビコリテ、養分ヲ吸ヒ取ル。草木ノ倒レザルモ、コノ根アルガ故ナリ。芽ハ、次第ニ成長シ

テ、莖、又ハ、幹トナリ、枝ヲ分チ、葉ヲ生ズ。
初ハ、掌ノ上ニ、數百粒ヲモ載セ得ベキ、小キ
種ニテモ、芽ト根トヲ生ジテ、年ヲ經レバ、幾
カ、ヘトイフバカリノ大木トモナルナリ。
凡、植物ニハ、稻、豆、粟等ノ如ク、春、芽ヲ生ジテ、
秋冬ノ頃ニ枯ル、モアリ。又、麥、菜等ノ如ク、
秋、芽ヲ生ジ、翌年ノ夏ニ至リテ枯ル、モア
リ。是等ハ、ホ、一個年ヲ命トスレドモ、松、杉、
桑、茶、漆等ノ如ク、數十年、若クハ、數百年ノ生
命ヲ保ツモアルナリ。

第七課 伊藤小左衛門

伊藤小左衛門は、伊勢の國三重郡四郷村シヨウゴウの
人にして、家代々、農を業としけり。
小左衛門、若き時より、産業をおこさんと思
ふ志ありき。外國貿易の開けんと思せし頃、製
茶の業を思ひ立ち、山地を開きて、茶の樹を

うゑ、人々にも勧めしに、うべなはざるのみならず、あざけり笑ふ者さへありき。小左衛門、少しもかへりみず、益、茶園をひろめて、五年の後には、二十貫目の茶を得るに至れり。後、横濱開港となりければ、十餘萬斤の茶を、外國人に賣り渡し、二千六百兩の利を得たり。先にあざけりし者ども、之を見て、大に感じ、争ひて、製茶の業を始めしかば、遂に、國中

に廣まりて、産出
おびたゞしくな
れり。

小左衛門、又、養蠶
の、益あるを知り、先、桑
二百株を得て、業を起
し、多年の苦心をへつ
ひに、製絲機械をも備へて、多くの生絲を造



り出だせり。されど、品質良からずして、すく
なからぬ損失をせり。

小左衛門は、自、上野の富岡製絲場に入りて、
業を修め、歸りて後、五十二貫目の絲を製し
て、横濱に送りしに、また、損失をかうむれり。
小左衛門、なほ、少しもたゆまず、明治九年、妻
と娘とを、富岡にやりて、業を習はしめ、更に、
機械を改め、職工をまし、二百十貫目の絲を

製して、横濱に送れり。此の時、外商、富岡製に
もおとらずとて、高價に買ひ取れり。

小左衛門、いよ／＼はげみて、製絲、製茶の業
を盛にし、遂に、其の志をとぐるを得たり。

第八課 茶

茶は、香しく、風味よき飲料にて、心をさはや
かならしむるものなり。

茶には、緑茶、紅茶等の別あり。我が國にて産

するは、多くは、緑茶なり。その上等品を、玉露といひ、下等品を、番茶といふ。

茶の樹を培養するには、暖にして、濕氣少き土地をよしとす。種をまきて、凡、四年目より、毎年五月の頃、若き芽をつみとりて製するなり。

産地は、山城の宇治、古より名あり。静岡、三重、岐阜等の諸縣下、并に、臺灣にても、多く産し、

我が國輸出品中の主要なるものなり。

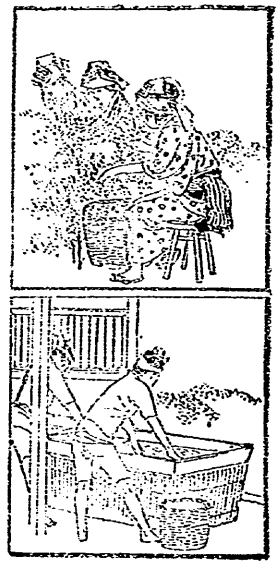
第九課 分業

茶ヲ製スルニ、芽ヲツムハ、概、女子ノ業ニテ、コレヲ製シ上グルハ、男子ノ業ナリ。

芽ヲツムヨリ、製シ上グルマデ、スベテ、一人ニテスルヨリハ、業ヲ分ツテ、便ナリトス。モシ、一人ニテ、或ハツミ、或ハムシ、或ハモミ、或ハモチ運ブナドノコトヲセバ、ソノ忙シサ

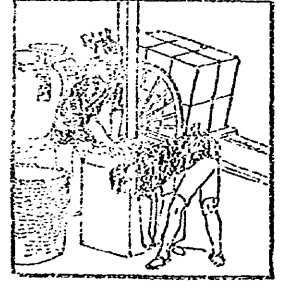
ニタヘズ、種々ノコトニ、注意ヲ要スルガ故
ニ、煩シサモ、亦、限ナカルベシ。

之ニ反シテ、數人ニテ、業ヲ分タンニハ、專ニ
務ムルコトヲ得ベキガ故ニ、オノツカラ、其
ノ業ニ巧ニシテ、良キモノヲモ製シ多量ニ
モ造ルコトヲ得ベシ。
カクノゴトク、業ヲ分ツコトヲ、分業トイフ
ナリ。



世ノ中ノ事ハ、概、分
業ニテ行フナリ。タ
トヘバ、一家ノ生計

ヲ營ムニ、男子ハ、日々、職業ヲ勉メ、女子ハ、衣
食ノ事ヲ專ニスルガ如シ。其ノ他、農夫ノ、穀
物、野菜ヲ作り、職工
ノ、器具、家屋ヲ造り、
商人ノ、物ヲ賣買ス



ルモ、亦、皆、分業ニアラザルハナシ。

スベテ、人ハ、各、業ヲ分チ、互ニ、相助ケテ、生活ヲ全クスルヲ得ルモノナリ。

第十課 女子の務

女子の務は、多く、家内の事で、食物をととのへ、衣服を仕立て、老人をいたはり、小兒を養育し、又、親戚、近隣とつきあひ、來客をもてなすなどが、重なる事でございます。たとひ、學

問、技藝にすぐれてをりましても、是等の事がかけておましては、やくにはたちませぬ。それ故、女子は、をさない時から、つとめて、家事の手傳をして、是等の事にと、こほりない様にならねばなりません。

其の上、暇がありましたらば、縫箔、編物、造花等の付けこをするも宜しうございませう。絲繰、機織なども、女子には、適當の業でござ

います。我が國の重要な産物で、年々、海外に輸出する織物、生絲などは、たいてい、女子の手で出来るのでございます。

たゞ、己が身を着かざることばかり心がけて、女子の、大切な務をおろそかにしてはなりません。

文法 我、己、其、彼などは、替、さしていふべき事ありて、其の事物の名に代へて用ゐたるなり。之を、代名詞と云ふ。

第十一課 工藝

我が國の人は、昔より、手工に長けたり。そのうへ、常に、よき景色に在れて、風雅の心に富みたれば、工藝品にも、おのづから、一種の趣味、加はれり。

我が工藝品の中にて、最、名高きは、焼物、塗物、織物等なり。

織物の精巧なるは、西陣織にて、輸出額の多

きは、羽二重なり。焼物の中、名の聞えたるは、瀬戸焼、九谷焼、清水焼、伊萬里焼などにて、塗物の最麗しきは、蒔繪なり。

其の他をば、細工物には、竹細工、寄木細工、紙細工、麥稗細工等、其の種類は、なほだ多く、中には、麥稗細工、竹細工等は、年々、外國に輸出する量おびたし。

ちかごろは、宏大なる機械をしかけ、多数の

職工をつかふ紡績工場、織

物工場、製絲場など、年々に、

増加し、製造

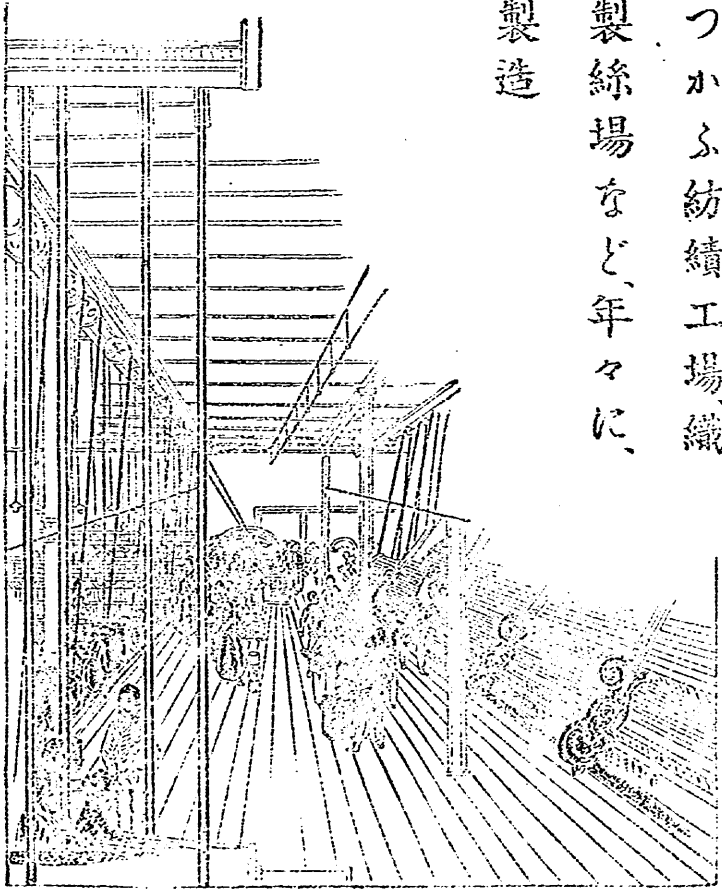
の高も、

ますます

す、多く

なれり。

又、理科



の學問も、大に進歩したれば、精巧なる機械もでき、水力、蒸氣力、又は、電氣力などをかりて、之を動す術も發達したれば、製品は、精良になり、價も、いよ／＼ひく／＼なれり。

第十二課 養蠶

我が國ハ、氣候溫和ナレバ、内地、到ルトコロ、蠶ヲ養ハザルハナシ。殊ニ、カウツケイハ、シロイハ、キ上野、シロイハ、キ岩代、シロイハ、キ磐城、シロイハ、キ信濃、シロイハ、キ甲斐等ハ、其ノ業、最盛ナリ。

蠶ノ飼方ハ、先、其ノ卵ノ孵化シタル時、藁坐ニ掃キタテ、初ハ、桑ヲ、細ニキザミテ、之ヲアタヘ、成長スルニシタガヒテ、次第ニ、キザミカタヲ、アラクシ、後ニハ、丸葉、又ハ、枝ニツキタルマ、ヲ與フ。サテ、蠶ハ、發生シテヨリ、四眠ノ後、絲ヲ吐キテ、繭ヲツクルナリ。蠶ヲ養フニハ、氣候、蠶室ノ構造、桑ノ擇方、飼方等ニ注意スルヲ要ス。コレ、繭ノ收穫、及、性

質等ニ、大ナル關係アレバナリ。

繭ヨリトリタル絲ヲ、生絲トイフ。即、絹織物ノ原料トナルモノニシテ、我が國ノ輸出品中、金額ノ、最多キモノナリ。

第十三課 上杉治憲

ウエスギハルノリ 上杉治憲は、ウツセンヨネザハ 羽前米澤の藩主なり。初、其の領内貧しかりければ、之を救はんと志し、先、己が朝夕の膳部をば、一汁一菜とし、衣服は、木

綿に限りて、絹布を用おず、自、先んじて、田畑を耕し、夫人をして、蠶を養ひ、機を織らしめ、しきりに、士民を勵まして、産業を盛にすることをはかりけり。又、儉約を行ひてあま



し得たる財にて、桑、漆、楮等の苗木、各百萬本
づゝを買ひ入れて、ひろく領内に栽ゑしめ、
且、養蠶の術にくはしきもの機を織るにた
けたるもの等を雇ひ入れて、其の業を、士民
に教へしめき。

是より、やうやく、精巧なる織物を製出する
を得て、治憲の初志の如く、領内富み榮ゆる
に至れり。

今、尚、米澤織の名、世に高く、年々、多額を産出
す。

第十四課 家を治むる道

家を治めんとする者は、日夜、家事をよく勤
めて怠らず、財を用ゐるには、みだりに費さ
ずして、専、儉約を行ふべし。

勤むれば、家業、ますます、榮え、儉約なれば、財
を失はずして、家事、よく整ふ。勤むるは、財を

得る本なり。儉約は、財を保つ道なり。

財を得ざれば、父母、妻子を養ふこと能はず、財を保たざれば、音信、贈答の禮をととのへ、不時のわざはひにそなへ、又、人の貧しきを救ふこと能はざるべし。

されば、勤と儉とは、家を治むるにかくべからず。二つのもの並び行はれて、家道立つ。

さて、之を行ふべき工夫は、こらへ忍ぶに在り。苦勞を忍びて、よく勤め、私慾をこらへて、儉約を行ふべし。

(家道訓參照)

第十五課 四季

木枯の風吹きあれて、霜柱立つ頃は、晝短くて、夜長く、氷は、池の面をとち、雪は、ま白に降りしきて、鳴き渡る雁の聲さへ、寒げなり。

若草もえ出で、花咲きにほふ頃となれば、百鳥のさへづる聲ものどかにて、心うきたつ

ばかりなり。

青葉のしげる頃

となれば、晝長く

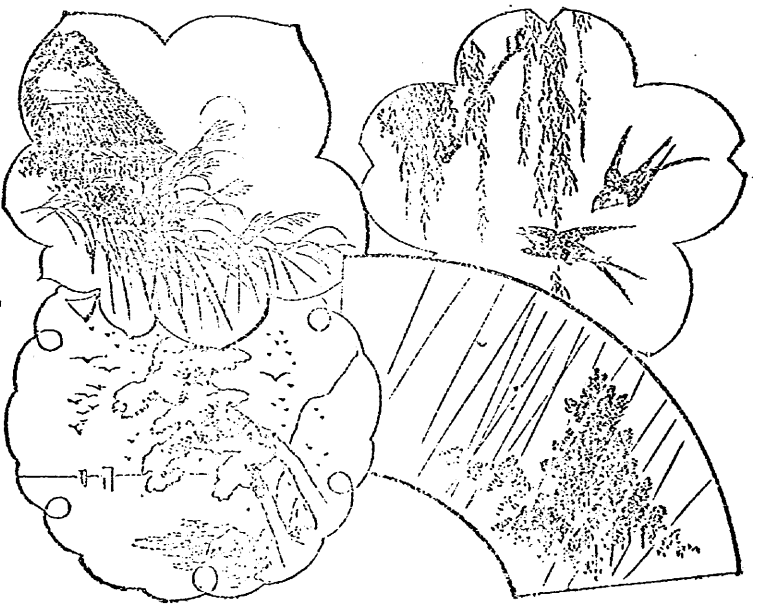
して、夜短し。やく

が如き夏の空に

はかにかき曇り

て、夕立のはげし

く降り出でたる



は、すゞしき、いふばかりなし。

草むらになく虫の音、あはれにきこえ、野山

の木々色づきて、錦を織りかくる頃は、のき

ばの月もすみまさりて、心、何となくさびし

げなり。

春夏の間は、物、皆、日々に榮え行けども、秋よ

り、次第に衰へて、また、春のたちかへるまで

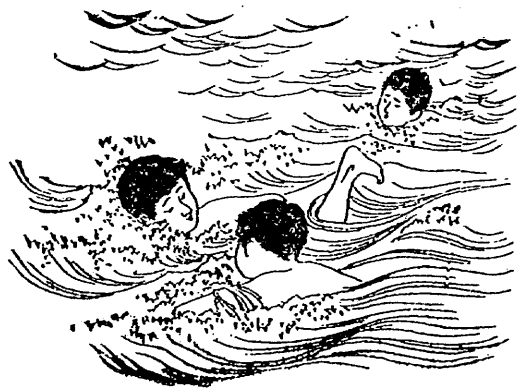
は、冬ごもりをする時なり。

文法 吹き、立つ、降り、咲き、色づき、かへる、する、あり、ナドハ、事物ノ動作現象ヲイヒアラハセル詞ニテ、之ヲ、動詞トイフ。

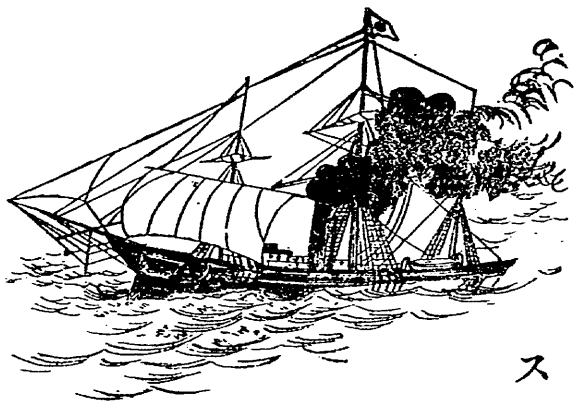
第十六課 游泳

多クノ小兒等、濱邊ニ出デ、遊ベリ。水中ニ入リテ、遊グモアリ。ク、ルモアリ。小舟ニ乗リテ、沖ニコギ出デタルモアリ。浪ヲモオソレズシテ、ヨク遊ゲルモノハ、其ノワザニ熟セルナラン。

幼キトキノシワザニテ、成長シタル後ノ事モ知ラルトイヘバ、コノ小兒等ハ、壯年ニ至ラバ、或ハ海上ノ生活ヲ營ムナルベシ。



我が國ハ、四方、海ニシテ、水産物ニ富メバ、漁業ヲ營ムモ面白カルベク、蒸氣船、帆前船ニ乗リテ、遠洋ノ航海ヲ業ト



スルモ樂シカルベク、又、海軍
ノ軍人トナルモ、名譽ノコ
トナルベシ。
コノ小兒等ノ行末ヲ思
ヘバ、誠ニ、タノモシキ心
地スルナリ。

第十七課 河海

水上ニ、船ヲ浮ベテ、自在ニ往來スルハ、タト

ヘバ、陸地ニ、車馬ヲハスルガ如シ。我が國ハ
四面、海ニシテ、良港多ク、河流モ、スクナカラ
ザレバ、交通、頗便利ナリ。

又、河海ヨリハ、多ク、産物ヲ出ダス。特ニ、海ハ、
廣大ナレバ、魚介、海草ヨリ、鯨、ラ、臘虎等ノ海獸
ニ至ルマデ、殆、カゾヘ盡シ難シ。

河ハ、産物、海ニ及バザレドモ、田畑ヲウルホ
シテ、農業ヲ助ケ、或ハ、水力ヲ供シテ、工業ヲ

利スル等ノ效多シ。

海ト河トハ、カクノ如ク、人ヲ益スルモノナ
レバ、河海ニソヒテ便ナル地ニハ、人々集リ
テ、村落ヲナシ、都會ヲモナスナリ。タトヘバ、
東京ハ、海ト隅田川トニソヒ、京都ハ、鴨川ニ
マタガリ、大阪ハ、海ト淀川トニソヒタルガ
如シ。

又、船ヲトムルニ便利ナル港ニハ、盛大ナル
貿易場モ開カル、ナリ。長崎、横濱、神戸、函館
等ノ如キ、コレナリ。

第十八課 商業見習

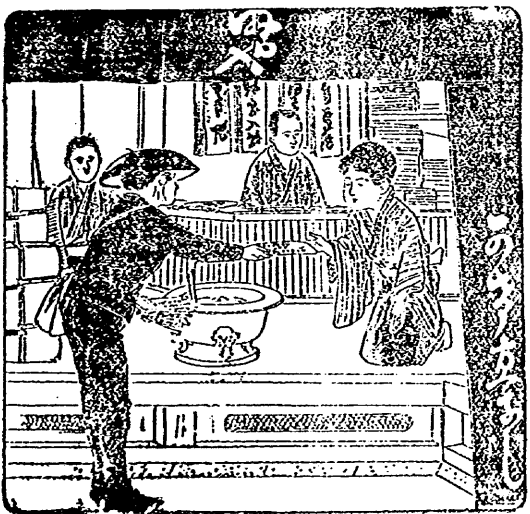
國友敬次郎は、小學校を卒業して後、商業見
習として、ある商人の家に奉公しけるに、或
日、國元の兄より、荷物と手紙と届きたり。

暑き烈しく候、處無事に御つとめのよし
何よりの事に存じ候、當方父上始皆々別

條なく候へば御安心なされるべく候

五十

單衣二枚母より
其許へ遺すべき様
仰せられ候に付小
包郵便にて差送り
候間御受取なさる
べく候父上よりは
御主人大切に相勤め朋輩仲よく致すべ



き様異々も仰せ傳へられ候よろしく御心
得これあるべく候算筆其他必要のこと
はつね々心掛けひまを見て御勉強な
さるべく候尚時節柄御身大切に致され
候様祈入り候早々以上

敬次郎は大に喜び其の夜返事をしたため
てさし出だせり。

御手紙拝見仕り候御両親様はじめ皆々

様御機嫌よく入らせられ候由大慶の至
に存じ奉り候單衣二枚御送り下され有
難く拜受仕り候

御教訓の御言謹んで拜兼仕り候御主人
も番頭衆も相變らず懇に御引立下され
朋輩仲よく相勤め居り候間御安心下さ
れ度候先はとりあへず御返事申上げた
くかくの如くに御座候早々頓首

第十九課 貨幣の用

上古には貨幣といふものが無かったので
人々互に物と物とを交換して用を辨じて
をりました。

譬へば、こゝに焼物師があるとしませう。こ
の人が米を得ようと思つて、農夫の家にい
つて、自分が造つた器とかへてもらはうと
するに、この農夫は、雉、兔の類を得たいとは

思ふが、器は入用でないといふ時には、焼物師は、又、狩人カキウラのもとにいつて、交換を求め、尚、この狩人が、承諾しない時には、他に、あまねく、相手をさがさねばなりません。農夫も、狩人も、自分が得たいと思ふ物があるときには、亦、この様に、手数がかゝつたので、ごさいます。

か様を不便がありますので、遂に、物と物とを交換する媒となるべきものを定める様になりました。これが、貨幣のはじめで、ごさいます。

貨幣ができましたから、は、餘つてゐるものは、賣つて、之に換へ、何でも、入用のものを、自由自由に買はれる様になりました。

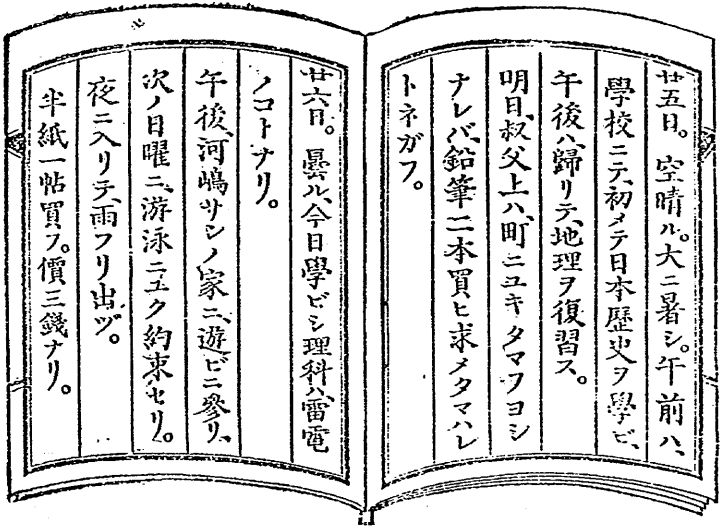
さて、この貨幣には、最初、いかなるものを用ゐたかといふに、國によりて、一樣で、ごさい

ません。我が國では、上古、稻を用ひまして、物の價を定めるには、稻幾束、幾十把など、申しました。又、支那では、貝を用ひ、西洋では、烟草、毛皮、牛などを用ひた國もありました。今は、いづれの國でも、金、銀、銅、及白銅等を用ひて、貨幣として居ります。また、携帯の便をはかつて、銀行では、政府の許を受けて、紙幣をも發行いたします。

第二十課 日記

商人の、日々、賣買、取引等を記しかきて、金銭の出納を知るは、極めて、必要のことなり。吾等も、日記をつぐり置かば、記憶の助ともなり、一生の歴史ともなるべし。

日記は、要をつみて記すをよしとす。先、其の日の天氣模様、暑さ寒さなどを記し、次に、通學、外出等の事より、見聞したる、面白きこと



がら、又は、筆墨等を
 買ひ入れたること
 などを、書き入れ
 おくべし。

少年の時は、學校、家
 庭、又は、朋友間の事
 柄を記しおかば足
 るべけれども、尚、家

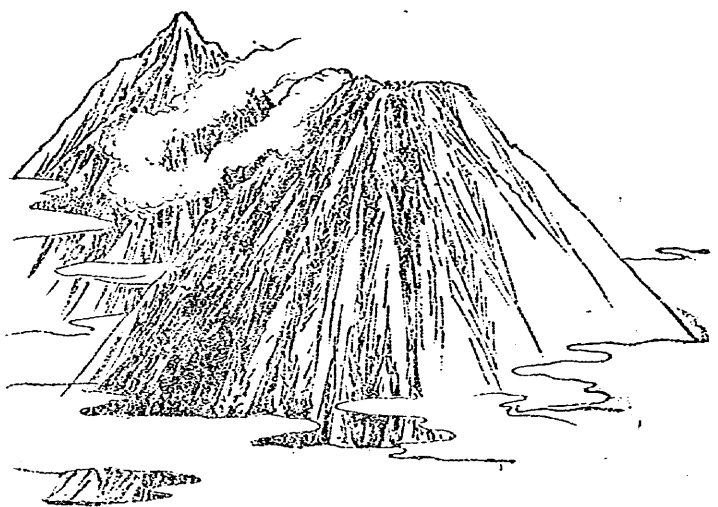
族、來客のことより、廣く、世の中の事柄をも
 記さば、作文の助ともなり、後のたのしみと
 もならん。

日記には、又、旅日記といふものあり。修學旅
 行の時などに、通行せし地名、里程、民業、風俗、
 山川の景色、旅宿の模様、同行者の間に起り
 しことなどを、記しおかば、地理を知る便
 利もありて、興味大なるべし。

文法 少き、同じき、烈しき、たのもしきナドハ、事物の形状、情意等ヲイヒアラハス詞ニテ、之ヲ形容詞トイフ。

第二十一課 霧嶋山 (二)

霧嶋山ハ、日向、大隅ニマタガリテ、山ハ、東西ノニツニ分ル。西ナルヲ、カラクニシテ韓國嶽トイヒ、東ナルヲ、タカチホ高千穂ノ峰トイフ。何レモ、火山ニシテ、時々、煙、或ハ、火ヲフキ出ダスコトアリ。世ニ傳フ。昔、皇孫瓊々杵尊降臨シタマヒシ時、



コノ山、霧ノ中ニ、嶋ノ立チタル如ク見エケレバ、霧嶋山ト名ヅケ給ヘリト。
コノ山ニ登ルベキ道、ニツアリ。何レヨリ登ルモ、風光ウルハシク、旅ノ勞ヲオボユルコ

トナシ。山下ニハ、温泉アリ。浴シ終ヘテ、霧嶋神社ニ詣ヅ。宮居、神サビテ、殊ニ美シ。

コ、ヲ發シ、雜樹生ヒ茂リテ、日影モ見エザル程ノ處ヲ、五十町餘、登リニ登レバ、是ヨリ上ハ、樹木、一本モナク、四方ウチハレテ、薩摩、大隅、日向ノ山々ハ、アシノ下ニ拜伏スルガ如クニテ、一モ、目ヲサヘギルモノナシ。

遙ノカナタヲ見レバ、青疊ヲシキタルガ如キ海中ニ、突然ト秀デ、盆石ニ似タル櫻嶋山アリ。頂ヨリ、白キ煙ノ立ち上ル景色、筆紙ニ盡シ難シ。

第二十二課 霧嶋山 (三)

コノ草バカリナル處ヲ、又、五十町ホド登レバ、コレヨリ上ハ、草モナク、只、栗ホドノ燒石ノミナリ。路、益ケハシク、登ルニ從ヒテ、天地ノ氣色カハリ、不時ニ、下ノ方ヨリ、雨ソ、ギ

來リ、或ハ、風、横サマニフキ來ルコトアリテ、
 殆、眺望ノ暇ナシ。折々ハ、ウツブシニナリテ、
 風ヲ避ケ、千辛萬苦シテ馬脊^{ウマノセ}越^{ゴエ}トイフ處、八
 町ガ間ヲ走り過グレバ、マツスグニ登ル處
 アリテ、絶頂ニ達ス。

絶頂ハ、尖リテ、僅ノ地面ニ、天^{アマノ}逆^ノ鋒^{サカホコ}アリ。全體
 ハ、カラカネノ如クニ見ユレドモ、風霜ニサ
 ラセルモノナレバ、青クサビテ、シカト知レ

難シ。長サハ、一丈ニモ餘リ、太サハ、大ナル竹
 ホドナリ。土中ニ入りタル先ノ方ハ、何程ナ
 ルカ、知ルベカラズ。絶頂ハ、コノ鋒一本ノミ
 ニテ、外ニ、堂宇等ノ如キモノモナシ。鋒ハ、神
 代ノ舊物ナリヤ否ヤハ知ラレザレド、三百
 年、五百年程ノ、近キモノトハ見エザリキ。
 コノ日ハ、アヤニクニ、雲アリテ、雨サヘ、途ニ
 テ降り出デタリ。モシ、天氣ノ晴レタルトキ

コ、ヨリ、四方ヲ見渡サバ、眺望ノ美イカナ
ラント思ヒヤラレタリ。
(西遊記參照)

第二十三課 太沽砲臺の占領

明治三十三年六月、清國に、義和團ギワツダンといふ暴徒起りて、鐵道をこぼち、電信線をたち、外人を殺害し、北京にせまりて、居留地を焼きはらひ、公使館を砲撃せり。清國政府は、之を討ち平げざるのみならず、暗に、其の暴舉を助くるが如きさまなりき。

六月十七日、太沽砲臺タイクの清兵は、砲門を開きて、列國聯合艦隊に向ひて、戦をいどめり。聯合艦隊は、直に、之に應じて、砲臺の前面を砲撃す。戦のたけをはなる頃、陸戦隊は、砲臺の背面向ひて行進せり。時に我が兵は、其の後軍にあり。清兵、よく戦ひければ、前軍苦戦し、急に縦列を變じて、横列散兵に改めたり。

我が兵、機に乗じ、進みて、砲臺にせまりぬ。清兵、必死となりてふせぎ戦ふ。彈丸雨の如く下る。指揮官服部中佐以下、戦死せしもの多し。我が兵屈せず、とつかんして進み、直に石門に迫る。其の右側に、砲彈のうがらし穴ありければ、白石大尉は、急に、これより入りて、門上に立ち、大音聲に「日本兵先登第一」と叫びたり。我が兵、石門をおし開き、英兵と並び進みたりしに、清兵、膽を抜かれて逃げ去れり。かくて、日章旗は、はやくも、高く、砲臺上に掲げられたり。

第二十四課 天津城の陥落

明治三十三年七月十三日、我が軍は、列國聯合軍の主力となりて、天津城を攻め、苦戦すること一晝夜にして、つひに、之を抜けり。

この日、我が兵は、早朝より、英、米、佛の兵と、天

津城の南門に向ひ、露兵は、獨兵、及、佛の一部の兵と、水師營に向へり。

かくて、我が兵、南門に近づきしに、清兵は、はやくも、砲門を開きければ、我が砲兵も、これに應じて、砲撃を加へたり。砲戦、凡一時間の後、我が歩兵は、佛、英、米の兵と共に、突撃して進みしに、清兵、こゝを先途とはげしく、銃砲を發射しければ、大隊長服部少佐以下、戦死の地に達せり。

せしもの、甚多かりき。我が兵、勇をふるひ、屍をこえて進み、南門を距ること、凡百間ばかりの地に達せり。

時に、清兵、城外の堀に、身をかくして、斜に射撃するものありしかば、彈丸、三面より、我が兵の頭上に注ぎ、死傷するもの算なし。

我が兵、一步を退かば、清兵、忽、勢を得て、聯合軍は、全敗するに至るべきが故に、士卒、皆、死

を決して、かたく、其の地を守りけり。

翌十四日、天、まさに明けんとする頃、我が工兵は、彈丸を冒して、城門に進みより、火藥を用ゐて、門扉を破れり。此のひゞきを合圖として、全軍、一時に、とつかんしてせまりしに、門内に、更に、一門ありて、入ることを得ず。時に、我が決死の兵、城壁をこえ、城門のくさりを切りて、門扉を開きければ、我が兵、先、突進

して、清兵を追ひはらひ、はやくも、日章旗を、南門上に、高く掲げたり。これ、天津城占領の先登なり。

文法 先登なり、せまりし、進まんナドノなり、し、ん、ナドハ、動詞、又ハ、名詞等ニツハリテ、其ノ意義ヲ助ク。之ヲ、助動詞トイフ。

第二十五課 雲にそびゆる

雲にそびゆる 富士のみね

さゝなみよする 琵琶のうみ

Y. 20. 8

8
285



明治三十二年十一月一日
 明治三十一年十月二十二日
 明治三十年九月十三日
 明治二十九年八月十七日
 明治二十八年五月四日
 明治二十七年四月二十五日
 明治二十六年三月十七日
 訂正 訂正 訂正 訂正 訂正 訂正 訂正 訂正
 再版 再版 再版 再版 再版 再版 再版 再版
 印刷 印刷 印刷 印刷 印刷 印刷 印刷 印刷

發行所
 發行所
 發行所
 發行所
 發行所
 發行所
 發行所
 發行所

西澤之助
 橋本忠次郎
 河本龜之助
 東京市日橋八區番築地
 東京市日橋一區番築地
 東京市日橋一區番築地
 東京市日橋一區番築地

全八冊	定價
卷ノ一金拾九錢	卷ノ五金貳拾壹錢
卷ノ二金拾九錢	卷ノ六金貳拾壹錢
卷ノ三金貳拾錢	卷ノ七金貳拾壹錢
卷ノ四金貳拾錢	卷ノ八金貳拾壹錢
全八冊	金壹圓六拾貳錢

(高等小學國語讀本別冊)

高等小學國語讀本一終

景色たへなる 大やまと
 あつささむさの ほともよく
 花さきにほひ 鳥うたひ
 瑞穂ゆたかに みのるなり
 がゝるめでたき 國はしも
 國てふくにゝ たぐひなし

